

2016 年度日本語教育実習 最終レポート

私は大学で日本語教育について学んできて四年目になる。日本語教育について全くの知識も無い状態からはじまり、実際に海外（オーストラリア）で日本語を教える経験もさせてもらい、この四年間の日本語教育課程は私にとって、とても濃いもので最も私を成長させてくれたものだとっても過言ではない。よって、今回私の日本語教育過程を振り返り、自身の変化や成長について述べていきたいと考える。今までにいくつかのレポートを提出してきたが、それらを読み返してみると、大きく分けて二つの変化に気づく事ができた。それは、良い変化と見直すべき変化である。

まず始めに、良い変化について述べようと思う。一つ目は技術面における良い変化である。一年次のレポートを読み返してみたところ、私が当時課題としていたのはアイコンタクト、フィードバック、口癖の三つだった。私としては現在この三つの点は改善された様に感じている。一年次は学習者に目を向ける余裕がなく悩んでいたが、現在は意識なしにアイコンタクトをとれるようになった。またアイコンタクトが少なかったとしても、その事に授業終了時点で気づき、反省することができるようになった。フィードバックについても、フィードバックを返すだけでなく、学習者の答えから展開させて会話につなげる事ができる様になった。口癖については未だに改善すべき点が残っているが、以前の様に間違えたときに、「間違っ」と口に出してしまうことはなくなった。それだけでなく、授業経験を重ねた事で精神的にも変化があり、全体的に余裕をもって授業ができるようになり、表情や声の大きさ等も自然と改善されたように思う。次に意識の変化である。正直なところ以前の私は、一つの授業を私の一つのパフォーマンスであるように、毎回完璧に完成させる事が第一にあった。教案作成時も以前は学習者のことを考える前に、与えられた授業時間を埋めるために、失敗しない無難な教え方やアクティビティをパズルのように当てはめていた。しかし現在は、一つの項目を教えるにしてもどの方法が最適なのか、どういった流れにしたら学習者が飽きないか、また学習者の記憶に残すにはどのようなアクティビティが必要か、といったことを第一に考える様になった。なにより私の授業が学習者の今後の人生の助けになることができるかどうかを意識する様になった。

このように私の意識が変わるきっかけとなったのが二年終了時に渡豪し現地の高校で日本語アシスタントを経験したことである。これからの進路を考える大切な時期にある学生達に授業をさせてもらった事は、とても貴重な経験であった。私は最上級生の授業で一人の女の子に出会った。彼女は正直なところ優秀な生徒ではなかった。授業中も集中していなかったし、宿題も毎回やってくる事はなかった。しかし私が授業中に何気なく話した日本文化に彼女は興味を示し、その文化を知るために日本語を学ぶようになった。彼女は現在、大阪の高校での留学を終え、今後は日本に関わる仕事をしたいと話してくれた。また私が大阪にいる彼女を訪れた際、彼女は「日本文化と出会わせてくれて、人生の選択肢を増やしてくれてありがとう。」という言葉くれた。その時私は日本語を教えるという事は誰かの人生を変える事もある重要な役割であるという事に気づかされた。そしてその後の YMCA での実習で、実際にお金を払って自分の生活のため

に日本語学びにきている学習者の学習現場を体験したことで、より一層の責任感を持つ様になった。この実習が私は日本語教師の「学習者」だと言う意識から、生徒にとっての「教育者」だという意識に変わったきっかけであったように感じる。私にはこの変化が日本語教育過程において最も大切な変化だと感じ、この事に言葉や教科書からだけではなく、身をもって気づけたことに喜びを感じた。

二つ目は見直すべき変化である。これは異文化コミュニケーションのレポートを読み返して気づいたことなのだが、国別の文化の違いや学習スキルの違いを意識しなくなってしまっていたことである。この異文化間コミュニケーションの授業で、「相手を理解しようと努める事が、相互理解に繋がる」という言葉を耳にし、海外の人と関わっていく中で大切な事だとわたしはレポートで述べていた。しかし時が経つにつれて、その意識が薄れていた様に思う。私はこの日本語教育課程で、様々な国の学習者に日本語の授業を行ってきた。しかし学習者の理解速度が違う事を考えず、授業の教案を書き上げてきた。そのことによって起こる学習者の遅れや、やる気の増減に頭を抱えた事もあった。しかしそこで私がすべきだったのはその学習者の文化的背景も視野にいれ授業を展開する事であった。たとえば中国の学習者は母語で日本語と似た漢字を用いるため、比較的漢字を覚えるのがはやい傾向にある。にもかかわらず、漢字を使わない国の学習者に同じレベルを求めてしまえば、その学習者がいやになってしまうのも無理は無い。また、実習中に同じグループの教育者が一人の台湾人の学習者に中国出身としての会話を展開させようとしたところ、その学習者が「台湾出身です。」と訂正した事があった。その場面をみていた私は、深く考えておらず、即座に訂正した学習者に疑問をもっていた。しかし後日、歴史的な背景があると知り、私が他国の歴史や文化を知らない事で学習者に不快感を与える事もあり得ることに気づいた。授業は人対人で成り立つものであるため、相手との信頼関係は大事なものになってくる。日本語を学ぼうとしている学習者の母国について理解する事は、相互理解を深めるために大切な事だと考える。私はこのような事に実習中に気づかされ、新しい知識として心に留めたのだが、今回レポートを読み返した事で、以前同じことを学び、気をつけようところがけていた事自体を忘れてしまっていたことに気づき、深く反省した。

以上が、私がこの日本語教育課程を履修してきた中での変化である。良い変化も悪い変化も総じて言えるのは、これらの変化全てが私の今後の生活に役立つものだという事である。私がこれから日本語教師をめざしていくかは明確ではないが、この日本語教育課程で得られた対応力やものの見方、出会いは、今後私が何をやるにおいても重要な役割を果たすと確信している。これから2020年の東京オリンピックもあり、日本は更にグローバル化していく事が考えられるが、それと同時に日本の良さを多くの人に知ってもらえる良い機会だと考える。それに携わる職業は多くあると思うが、この大学で日本語教育課程を履修し、様々な経験をした私にしかできないことをしていきたいと考えている。また、これからの目標として常になにかから学び、成長し続ける人間でありたいと考えている。私は日本語教育課程を履修した事でこの四年間は学習と挑戦そして反省の繰り返しであった。正直きついと感じた事は何度もあったが、なにかをやり遂げるたびに感じる達成感のおかげで充実した濃い大学生活をおくることができた。これから就職し社会

に出るようになるが、どんな職業についても、現状に満足しただけ仕事をこなすのではなく、常に責任感と向上心をもって学習と挑戦、そして反省することをやめない、そんな社会人になっていきたい。